

IV 地域開発

古代山陰道と港を結ぶ拠点

湖山池南岸の狭い谷筋に位置する良田平田遺跡は、木簡や墨書土器が数多く出土し、その中でも「津」や「馬津」、「船」と書かれた墨書土器が注目されます。湖山池に古代の港である「津」が置かれていたことを示唆し遺跡は古代山陰道と湖山池を結ぶ位置にあることから船で輸送する物資を馬により運送するための拠点が置かれていた可能性があります。

農業経営の拠点

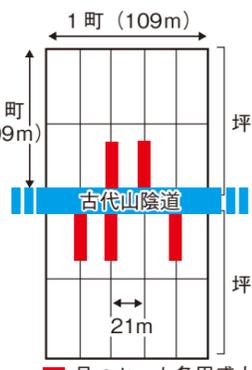
大桮遺跡は、千代川に注ぐ野坂川の流域に位置する遺跡で、掘立柱建物群とともに「田伏」「田中下」「田南」「柿田」など田んぼに関わる墨書土器が数多く出土し、この地域における農業経営の拠点であったと考えられます。周辺は756年に東大寺高庭荘となり遺跡には荘園（初期荘園）を管理する荘所と呼ばれる施設が置かれていた可能性もあります。

大規模な水田開発

古代山陰道の建設は、周囲の土地開発を伴うものでした。青谷上寺地遺跡と青谷横木遺跡では、古代山陰道の道路遺構と条里地割（土地区画）がセットで見つかっています。

青谷上寺地遺跡の条里遺構は古代山陰道に直交し、一町（109m）四方の区画内をさらに細分したあぜと考えられます。

青谷横木遺跡では1町（109m）四方の条里遺構が見つかり、幅が3～4mと広く、石（109m）が敷かれていることから道（作業道）としての役割も大きかったと考えられます。



青谷上寺地遺跡の条里地割復元



良田平田遺跡



大桮遺跡



青谷横木遺跡の条里遺構

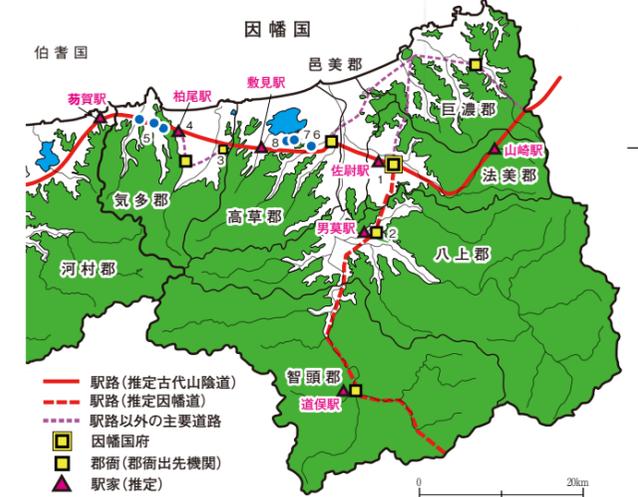
古代の因幡

～山陰道がつなぐ古代社会～

I 因幡国

701年に制定された大宝律令により、国内は国一郡一里（郷）の行政区画に分けられ、因幡国は巨濃・法美・邑美・八上・智頭・高草・気多の7郡で構成されていました。

この因幡国の古代社会を形づくる大動脈となったのが、古代山陰道でした。古代山陰道は律令国家が都と地方（国府）を結ぶために建設した七道駅路（官道）の一つで、いわゆる古代のハイウェイといえます。山陰道本線以外に山陽道との連絡道である「因幡道」があり、駅使と呼ばれる使者が馬（駅馬）を乗り継ぐための駅家が置かれていました。山陰道本線には山崎・佐尉・敷見・柏尾の4駅が、因幡道には莫男・道侯の2駅が知られています。

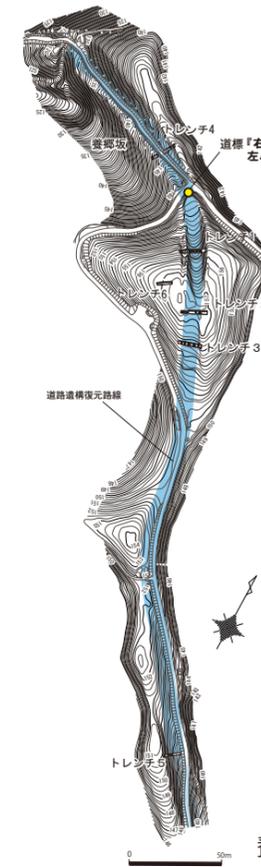


古代の因幡国のようす

II 古代山陰道

青谷東側丘陵に位置する養郷新林遺跡の発掘調査では、青谷横木遺跡から続く古代山陰道と考えられる道路遺構が新たに見つかっています。道路遺構は標高150m以上の丘陵尾根を400mにわたってまっすぐに延びており、現地形には切通しなどの道路痕跡が良好な状態で残されています。高低差の著しい峠を通過する古代官道が発掘調査で見つかった事例はほとんどなく、重要な発見といえます。

養郷新林遺跡の道路遺構は、側溝を備え、道幅が9mもある大規模なものでした。峠道であっても切土（オープンカット）工法や盛土工法など多様な土木技術を駆使し、により広い道幅を確保することで、国家権力を誇示していたと考えられます。



養郷新林遺跡遺跡の道路遺構と現地形



養郷新林遺跡道路遺構



鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県鳥取市国府町宮下 1260

TEL 0857-27-6711

FAX 0857-27-6712

ホームページ <https://www.pref.tottori.lg.jp/maibun>

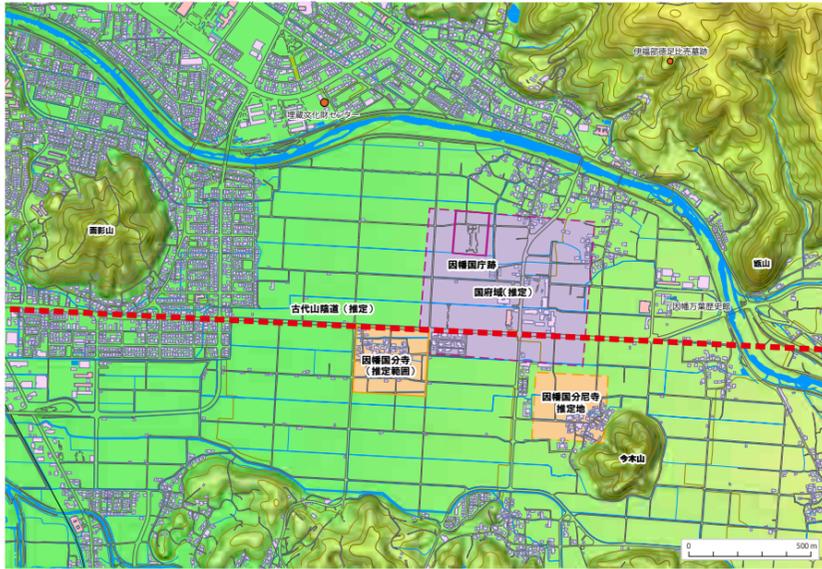
フェイスブック www.facebook.com/tottorimaibun

III 政治と社会

因幡国府

因幡国府は、因幡三山（甑山・今木山・面影山）に囲まれた法美平野の中央に置かれました。現在も中心的な施設である国府を指す「庁」という地名が残っています。国府の範囲は六町（660m）四方と考えられ、古代山陰道を基準線として国分寺や国分尼寺も計画的に配置されました。因幡の政治や文化の中心をなす古代都市として繁栄していた様子がうかがえます。

国司が政務や儀式を行う中心的な施設が国府（政庁）でした。因幡国府は国府内の北側に置かれ、発掘調査では廂をもつ大型建物が見つかり正殿と考えられています。見つかった国府は平安時代から鎌倉時代のもので、大伴家持が国司として活躍した奈良時代の国府も下層に眠っているとみられています。



因幡国府と古代山陰道



因幡国府正殿跡



因幡国府復元模型

因幡万葉歴史館

因幡国分寺

因幡国分寺は、現在の国分寺集落の下に眠っています。国分寺の範囲は2町（215m）四方とされ、発掘調査では塔跡、南門跡、築地塀などが見つっています。写真は塔跡で、礎石のあった位置では地面を掘り下げ土を入れ替える、「壺地業」と呼ばれる地盤改良の痕跡が確認されています（四角で囲んだ部分）。礎石や塔心礎は動かされ、現在の国分寺境内に安置されています。



因幡国分寺塔跡

郡 衙（郡役所）

八頭町万代寺遺跡は、八上郡衙とみられる遺跡です。遺跡周辺は山陰道と山陽道をつなぐ連絡道である「因幡道」が通過していたとみられ、駅家である「男莫駅」が周囲に置かれた可能性もあります。遺跡では、郡庁（政庁）が発見され、100m四方の広い敷地を持つことが判明しています。郡庁は通常50m四方ですが、万代寺遺跡は国府クラスの規模を誇る珍しい事例です。



八上郡衙（万代寺遺跡）の位置図

郡衙出先機関（郡役所）

戸島・馬場遺跡は、気多郡の東部を管轄する役所施設とみられる遺跡です。大型建物群が発見され、税として集めた租（米）を納めた正倉（米倉）も置かれたと考えられます。遺跡のすぐ北側を古代山陰道が通過し、高草郡とも境界を接する交通の要衝に位置することから、交通施設としても重要な役割を担っていた可能性があります。

駅 家（交通関連遺跡）

因幡国では、発掘調査で明らかになった駅家はありますが、山陽道に置かれた駅家は官衙（役所）や寺院と同じく瓦葺きの格式高い建物が建っていたことが明らかとなっています。湯梨浜町石脇第3遺跡では、大型建物跡とともに瓦が数多く出土し、伯耆国笥賀駅家が置かれた可能性が指摘されています。

会下・郡家遺跡は古代山陰道の推定ルート上に位置し、柏尾駅家の候補地の一つです。青谷へと通じる険しい峠道である「会下坂」の麓に位置し、遺跡では掘立柱建物群とともに墨書土器が数多く出土しています。本遺跡から南へ3kmほど谷を入ると、気多郡衙（郡役所）とされる上原遺跡群があり、古代山陰道から分岐した連絡道が郡衙へと通じていたと考えられます。



気多郡内の交通網と官衙（役所）



万代寺遺跡（八上郡衙）

提供：八頭町教育委員会



馬場遺跡の大型建物跡

提供：鳥取市教育委員会



会下・郡家遺跡



播磨国布勢駅家復元イメージ

提供：北海道教育大学教授 中村太一

